
魔法先生ネギま！ & チートな美少女転生者

疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！&チートな美少女転生者

【Nコード】

N3794U

【作者名】

疾風

【あらすじ】

和風志音^{わかぜしおん}。神のミスで死んでしまった彼女はネギまの世界へ転生させてもらうことに。しかも自分の好きなマンガ、ラノベの能力を数多く手に入れた。そんなチートとなった彼女は麻帆良学園で暴れまわる！

初投稿です。駄文です。そして更新は不定期です。それでも構わないという方は是非お付き合ってください。

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。第一話と、書かれている能力が違うところもありず。

ヴラドⅡツエペシュ様から設定の誤りをご指摘いただきました。
なので修正しました。

主人公設定

わかぜしおん
和風志音

麻帆良学園本校女子中等部2年A組（3年A組）所属。出席番号3番。帰宅部。

整った容姿をしたポニーテールの美少女。転生前は女子高生だったが、2 - A（3 - A）には中学生離れしたプロポーションの生徒が多いので普通になじんでいる。明るい性格だが何を考えてるかわからないような印象を抱かせる。（球磨川みたいな感じ？）友達思い。基本的に友人の名前はちゃんまたは君付けで呼ぶ。マンガやラノベが好きで、よくセリフをまねる。ゲームは一昔前のプレステなどのソフトが好き。（ドラクエ7など）重度のシヨタコン。しかし可愛がるだけで恋愛対象ではない。

能力・技術

・とある魔術の禁書目録

幻想殺し（イマジンプレイカー）

超能力（レベル5）

黒翼

魔術全般

・アスラクライン
アスラムキナ

機巧魔神全部

悪魔の力

・灼眼のシャナ

フレイムヘイズの能力やいろいろな自在法

無尽蔵の存在の力

・ゼロの使い魔
ガンタールヴ

・鋼の錬金術師
錬成陣なしの錬金術

・めだかボックス
アフノーマル
異常
マイナス
過負荷
マザーズタスク
暗器、お母さんのたしなみなど他の技術

・刀語

真庭忍法

その他の忍法

完成系変体刀を扱うのに必要な技術

錆白兵並みの剣術

虚刀流

見稽古

・戯言・人間シリーズ

暴力の世界の技術

十三階段の技術

哀川潤の能力

曲絃師

・ハヤテのごとく
伊澄並みの霊力
執事としての技能

・化物語

キスショットと同じ力

ヴァンパイアハンターの力

・デユラララー！

セルティの影

罪歌

静雄並みの力

その他

あまりに多くの能力を扱えるかわりに、魔力、気を扱うことは出来ない。また、仮契約バクテイオーもすることが出来ない。無尽蔵の魔力を持つが、それは魔術や悪魔の力を使うときにしか使えない。また、機巧魔神アスラマキナは、副葬少女ベリアルドールなしで無限に使える。

随時追加予定

武器・道具

その作品に出てくる道具はほぼ全て所有している。よく使うものは暗器術でしまい、それ以外は後方のアックアのように影に全てしまっている。

神特製iPad

神が作ったiPad。能力・武器の一覧や、その使い方、応用の仕方まで書かれている。新しい能力が追加されたら自動的にリストに加わるようになってる。iPadとしては使えない。とても頑丈で、よっぽど強力な衝撃じゃなきゃ壊れない。（少なくともタカミチの本気の居合い拳では壊れない。）

主人公設定（後書き）

こんな感じでやっていきたいと思います。

プロローグ 転生（前書き）

初投稿です。

駄文ですが最後まで読んでくださるとうれしいです。

プロローグ 転生

「最初っから説明すると、あなたは死にました。この世の運命わたしのミスで。そしてあなたはこのわたしの善意で異世界に転生できることになりました。おめでと〜わ〜パチパチ〜。」

「……。」

わたしの名前は和風志音。わかぜしおん某ハムスター的オーラを持つ少女や、某絶望教師の教え子の人並みな少女のような人間だ。

まあ、要するに普通といたいわけなんだけど。

今の現状を説明すると、前方、自称神。神様とは思えないような可愛らしい顔でなぜかメイド服。もうツッコむのも飽きた……。今の発言はさっきから説明されていたことをまとめたものなんだけどね。ミスという言葉に運命とルビが振られていることはもう先ほど散々文句を言ったのもういいや……。って感じ。周囲、謎の空間。以上説明終わり。

「それで私はどうしたらいいんだ。自称神。」

「えっと……。一応神様なんでもうちよつと敬語とか……。あと自称じゃないし……。」

「知るか。それで私はどうしたらいいんだ。」

「あ、あはははは〜。か、簡単なことです〜。」

自称神は困ったような表情をしながらも説明を始めた。

「えーと、とりあえず二次創作でありがちな異世界に転生をするんで好きな世界、あと、欲しければマンガや小説のキャラの能力なんかもあげるんで決めてください。」

・・・おお。えっなにこいつ。そんな神様っぽいこと出来るの？

「だからそうだって言ってるじゃないですかー！」

あ、心読まれた。

「いや、まさか神様がメイド服着てるとは思わないでしょ・・・。」

「こ、これは趣味です。」

「趣味って・・・。」

まあ、いいけど。

「ええと、異世界に転生するから好きな世界を選べ。だって？好きな世界ってマンガや小説も可能なの？」

「ええ可能です。」

なるほど。しかしやばいな。わたしは自慢じゃないけどマンガやラノベが大好きなのだ。休み時間はもちろん、授業中も教師の目を盗んで本を読んでいた。そんな数多くの本を愛しているこのわたしに一つの作品を選べたと・・・。うーん。

「残り1分。」

「は？」

1分だと？いやいやいや

「もうちよつと考える時間を頂戴よ！」

「残り50秒。」

「話を聞けー！」

落ち着け自分。

ほら最近ハマってたやつからチョイスしよう。・・・禁書？ハルヒ？
戯言シリーズ？

「残り40秒。」

うわ時間ねえ。

うん、これでいいや。

「自称神。」

「残り20びよ・・・ん、決まりましたか？」

「うん、とりあえずネギまの世界でお願い。」

魔法先生ネギま。マガジンで連載中の人気マンガだ。

古本屋で20巻ぐらいまで購入して10巻ぐらいまで読んだ。いや結構面白かった。

「魔法先生ネギまっつと。」

自称神はメモ帳にネギまと書いてからわたしのほうを向いた。

「じゃあ能力、何か決めてください。」

「決めた。」

「速い！」

これに関してはもう決まっている。

さて。

「イマジンプレイカー幻想殺しにレベル5の能力全部、黒翼、ルーン魔術、陰陽術、その他諸々の魔術、アスラムキナ機巧魔神全部、悪魔の力、フレイムヘイズの能力やいろいろな自在法、紅世の王なみの存在の力、零時迷子、ガンタールヴ、錬成陣なしの錬金術、アブノーマル異常、マイナス過負荷全部、暗器などその他の技術、真庭忍法にその他の忍法、完成系変体刀を扱うのに必要な技術、錆白兵並みの剣術、殺し名の技術、十三階段の技術、哀川潤並みのスベック、曲絃師、伊澄並みの霊力、キスショット並みの再生力、セルティの影、罪歌、静雄並みの力etc・・・。」

ここまで息継ぎなし。やばい苦しい。

「ちょ、ちょっとまってください。多すぎます。こんなに無理です。」

「あ、あとアスラマギナ機巧魔神は副葬少女なしで無限に使えて、悪魔の力を使っても非在下はしない、魔力は無尽蔵、各作品の武器、道具を大量に頂戴。あと能力を使わないときはただの一般人と同じくらいの力になるようにして。」

ようはオン・オフ可能にしてくれてことなんだよね。幻想殺しあると常に不幸だし、无尽蔵の魔力があつたら魔法使いたちに不審がられる。

そつえばさつき自称神が何か言つてた気がするけど。まあいいよね。どうせたいしたこと言つてないだろうし。

「いやいや重要なこといつてますよ。あといつまで呼び方が自称神なんですか。これは少し多すぎるのもうちよつと少なく。」

・・・・・・は？

「なんで？」

「転生者に授けられる能力や技術は最高5つって決まってるんです。わたしが決めました。」

ふざけるなよ。何言つてんだコスプレ女。

「コ、コスプレ女・・・。」

神様なのにと落ち込むコスプレ女。いちいち心を読むなよ。そ

んなことお構いなしにわたしは愚痴りはじめる。

「はあ。私が死んだのってあんたのせいでしょ。本当ならくるくフルボッコしたいところだけど好きな世界に好きな能力を持って転生させてやるって言うから我慢していたのにさ。」

わたしは不貞腐れたように続ける。

「あゝクラスメイトの桧山君とはいいかんじな雰囲気になってきたのにさゝ、三日後に控えたテストにむけてがんばって勉強してきたのにさゝ、ドラ。エフを中古で買ってがんばってやったのにさゝ。折角ゴットハンドの職業全員極めたのにさ。」

「うつ。」

さんざん愚痴ってからわたしは止めとばかりにつぶやく。

「それもこれも全部あんたのせいで台無しだよ。」

「うつうつ。」

コスプレ女は泣き出す寸前のような顔でうめいた。女子高生に泣かされそうになる神って一体・・・。とりあえずかわいそうになってきたからコスプレ女と言うのをやめよう。

「だ・か・ら・さあ。」

これ以上言つと本当に泣きそうなんでここらでストップ。そして顔をズイッと近づけて言った。

「ちょっとぐらいの無理は押し通そうよ。神様でしょ。」

自称神は泣きそうな顔（あつ、少し涙目）をあげて

「うう。し、仕方ないです。」

と言った。

おお、通った。さすが私。演技力あるな。

いや実を言うと別に生きていた世界にはそこまで未練はないんだよね。フは全部クリアしてやるのがなかったかし。松山君は惜しかったけど。

おっとたしかあいつは心を読めるんだった。

しかし自称神は携帯を取り出してどこかえ電話をしていた。ときおりすみませんとかそこをなんとか色々聞こえてきた。最終的に携帯を切った自称神はなんか暗い顔をしていた。まあミスで人を殺した上に規則を破ったんだからなあ。部下に色々言われたんだろう。

電話を終えた自称神はわたしのほうを向いた。

「お、オッケーです。だけど一つだけ条件があります。」

「ええ、まだなんかあんの？」

「はい。これほどの量の能力を扱えるようになる代わりにネギま世界の能力・・・魔法、神鳴流や忍術など魔力や気を使うものは一切使うことが出来ません。どんなに努力をしてもです。それに

仮契約をすることも出来ません。」

なんだ。

「それくらいならいいよ。もともと扱う気はなかったし。」

「よかった。」

自称神・・・いや神様は安堵の表情を浮かべてから笑った。

「では早速行ってもらいます。」

神様は指をぱちんと鳴らした。その瞬間、わたしは光に包まれた。

「神様。」

「ん。」

神様は呼び名が神様となっていることに少し驚いているようだ。そんな神様に、わたしは言う。

「わたしのわがママを通してくれてありがとう。」

たかだか一人の女子高生のわがママを、と続けた。

わたしの言葉に神様は少し驚いた顔をしたがすぐに笑って。

「どういたしまして。」

と返してくれた。

「それじゃあ。」

その言葉を聞いた途端、わたしの意識はとんだ。

ネギ・スプリングフィールド。

彼が麻帆良学園に着いたその日。

わたしは転生した。

ブローグ 転生（後書き）

能力や技術は追加されるかもしれませんが。

そして続きはいつになるかわかりません。

第一話 転生初日目 (前書き)

ちょっと短いです。あとテンポが悪いかも・・・。

第一話 転生初日目」

「……………」

気が付くとわたしはマンションか何かの一室にいた。

「ここは……………」

部屋を見回してみる。

机、ベット、クッション、本棚、パソコン、テレビ、テーブル。
その他生活に必要なものが一式揃っていた。

「ここで暮らせてことが……………」

なかなかいい部屋だ。

おお、しかも神様のやつわたしが前の世界で使っていたプレ。テの
メモリーカードやゲームキュー。のカセットなんかも用意してある。

あ、ドラ。エ7だ。

なんてことをしているうちにわたしは机の上に置かれている学生証
とわたしが前の世界で使っていた携
帯電話を見つけた。

そのとき禁書の o p . . . わたしが設定している着メロが鳴り響いた。

メール？

とりあえず見てみた。

『えゝミスで人を殺してしまった上に自分で決めた規則を破ってしまったので今まで築きあげたものが崩れそうな神です。』

神様！？しかもいきなり重っ！そんなこと言われたらなんか罪悪感を感じちゃうじゃないか。

まあ、そんなことは置いといて続き続き。

『あなたには今日ネギ君とともに転校生として2・Aに行ってもらいます。あとそこは女子寮の神楽坂明日菜の隣の部屋です。あとあなたは前の世界で女子高生でしたが、中学生として生活してもらいます。ええっと特に言うこともなくなっただんでこれで終わります。第二の人生楽しんでください。』

そっか女子高生だとネギ君たちと絡めないからな。神様が配慮してくれたのか。

面倒かけてばっかだな。何かお礼とかできないかな？

とか考えてたらメールにまだ続きがあることに気づいた。

『P S . この文章を読んだ10秒後にこの携帯は爆発します。』

ボンッ。っという音がしてわたしの携帯は粉々に爆ぜた。

「ああああああああっっ！！わたしの携帯があああああああああああー！！」

どこからか。ざまあ！という声がした気がした。

あのクソ野郎！！今度会うことが（ないと思うけど）あったらぶっ潰す。

ええとこういうときは……大嘘憑きだ。オールフイクション

即座にそれを実行。携帯の爆発をなかったことに。

すげえ。キレイに元通りになった。案外便利だなこれ。

携帯の修理を終えた後、時間の確認を行う。

「朝の……8時15分。」

たしかわたしは今日ネギ君と一緒に2 - Aに行くはず。
つまりは平日。

「たしか……女子寮からは電車を使わなきゃいけないほどの距離
があったはず……。」

あれ、これ結構時間やばくね？

「初日から遅刻はまずい！」

急いで制服に着替え、身だしなみを整える。
その途中、遅刻回避できそうな能力について考える。

機巧魔神の鋼って空間移動とか出来たっけ？いやできたとしてもあんなかいの目立つ。座標移動とかレベル5以外の超能力ってたしかもらってない。クソッ。なんでもらわなかったんだ。

悩んだ末一つの方法を実行することに決めた。

「封絶。」

そうつぶやいた瞬間火線の自在式が出現し、麻帆良学園全域を覆う炎を混ぜたドーム上の陽炎の壁が形成された。フレイムヘイズや紅世の徒が扱う自在法の一つ。ドーム内の空間をこの世の因果から孤立させる封絶と呼ばれる術式。この自在法を使うとドーム内の生物は動きを止める。つまり誰も見ていないということだ。

着替えも終わりバッグを持ち準備完了。

よし。窓枠に足をかけ、いつきに飛び降りる。

いや別に自殺しようというわけじゃないよ？

空中を落ちる途中。わたしはまた一つの自在法を行使した。炎の色は紅蓮。真っ赤な炎がわたしの背中から一对翼として出現した。

炎髪灼眼の討ち手シャナがよく使う紅蓮の双翼を使いいつきに飛んでいく。やばい。気持ちいい。

そんなこんなで女子中等部の校舎前にたどり着いた。
着地し、双翼を消し、周囲を確認する。

グットタイミング。どうやら明日菜とネギ君が絡んでるシーンのようだ。

さて、原作キャラとの会話を楽しむとしますか。

そう思い封絶を解いた。

第一話 転生初日目 (後書き)

次回はもう少し長めにします。

第二話 ネギ君が可愛すぎるby志音（前書き）

タイトルが思いつかず考えた結果力オスになった・・・。

ネギまの1話は次で終わりだと思います。

第二話 ネギ君が可愛すぎるb y志音

「取・り・消・しなさいよ〜」

封絶を解くと同時にそんな声が聞こえてくる。

アスナがネギ君をつかんでるシーンだ。

さて。どんな感じで話しかけようか……。第一印象は大事だし・

よし。

わたしは一気に走って勢いをつける。
そして。

「ちえりおー!!」

明日菜の背中に思いつきりとび蹴りをかました。

あ、ちなみにちえりおーっていうのは気合を入れる掛け声ね。ちえすとしてなくて。亡き奇策士のためにもわたしが日本中に流行らせねば。

「げほっ!」

勢いよく吹っ飛んでいくアスナ。

「うわー!」

ついでにネギ君。

「アスナ！？大丈夫！？」

「痛たた……。」

別にトチ狂ったわけじゃないよ？わたしにはわたしの目的があるのさ。

華麗に着地を決めたわたしはアスナと木乃香を無視してネギ君に駆け寄る。

「大丈夫！？けがはない！？」

「え……。あ、はい。」

「そう、それはよかった。」

そこでわたしはにこやかに、優しいお姉さんという感じで笑いかける。

「さあ、あんな怖い人たちは置いていつて行きましょう。」

「あ、はい……。」

戸惑いつつも素直に従うネギ君。うん第一印象は完璧。ああかわいい。やっぱりシヨタはいいね。フヒビ。

「ちょっと何すんのよー!!」

おつとあまりにネギ君が可愛いために忘れてたよ。これじゃネギ君の第一印象が完璧でもアスナと木乃香の第一印象が最悪じゃないか。切られちゃった。

「あははゝごめんごめん。わたし可愛い子供好きでさあ。子供がいじめられてるの我慢できなくてさあ。我を忘れてとび蹴りをかましちやったわけよ。テヘッ」

最後のテヘッ は自分でも可愛く言えたと思う。

「何がテヘッよ！！謝る気無いでしょアンタ！！」

こらこらテヘッじゃなくてテヘッ でしょ。ここ重要。

うゝんしかし逆効果か……。どうしたもんか……。

「まあまあアスナ。軽いジョークやって。相手も謝ってるし。それにこの子をいじめてたアスナにも非があるやろ？」

「うっ。べ、別にいじめてたわけじゃ……。」

おおナイス木乃香。これに乗じて一気に謝ってしまおう。

「いやゝさすがにとび蹴りはやりすぎたわ。ごめんね。」

と言って頭を下げる。

「うっ。もういいわよ。わたしも少し悪かったし……。」

「とび蹴りじゃなくてバックドロップにしとけば良かった・・・。」

「そっちのほうが駄目でしょ!」

「冗談よ。」

とうにかさつきからネギ君空気だな・・・。

会話に混ざれなくて困惑してる。ああ、その顔も可愛い。

「というかアンタ名前は？わたしの名前は神楽坂明日菜。こっちはわたしの友達の近衛木乃香。」

「わたし？わたしの名前は和風志音。シヨタとラノベのためなら命をはれる女よ。」

あ、二人の心の距離が凄い勢いで遠ざかっていく。

うわやばいやばい！いきなりそんなこと言ったら変態なオタクと思われるじゃないか。

そんな引きつった笑顔でわたしを見ないで！

とりあえず今の発言は心理掌握メンタルアウトで消去しておこう・・・。

「あ、あの〜。」

「「「ん?」「」」

おお、ネギ君かわいい！じゃなくて自分から会話に混ざってくるなんて。なにかな？

「僕、もう行っても「おゝいネギ君〜。」あ。」

おっとこの渋いダンディーなボイスは！？

「お久しぶりで〜す。ネギ君。」

「た、高畑先生！？」

高畑先生だ。しかし明日菜わかりやすいな〜。

「久しぶりータカミチー。」

「！？・・・つし、知り合い・・・！？」

「おっと隣の君は今日転校してくる和風君じゃないか。」

ん？わたし？

「あんた転校生だったの？」

「そういえば今日新しい先生と転校生が来るってじいちゃんが言ってたなあ。」

「うん、そう。」

しかしわたし女子高生の体だけど中学生になじめるかな？まあ2 - Aは中学生離れしてる人たちが多いから大丈夫だろうけど。

「二人とも、麻帆良学園へようこそ。いい所でしょう。和風君、」

ネギ先生』。」

「え．．．せ、先生？」

「あ、はいそうです。」

ネギ君はコホンと軽く咳き込む。その仕草も可愛い。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです．．．。」

「「え．．．ええーーーーーっ！！」」

アスナと木乃香の絶叫が響いた。

その後、高畑先生の案内でわたしたちは学園長室に案内された。

「学園長先生！！一体どーゆーことなんですか！？」

こう言ってるのはアスナだ。ジャージ姿の。何故ジャージなんてわたしの口からは説明できない。人には触れてもらいたくないことがあるのさ……。

まあ少し言ってしまうと謎の突風により制服が脱げてしまい、小学生が履くような恥ずかしいクマパンを憧れの高畑先生に見られ……
「ちよつと！！何全部説明しちゃってるのよ！！」

「モノローグに突っ込みを入れいでよ。全く。」

心を読むとは……。なんて奴だ。

「まあまあアスナちゃんや。」

これは学園長の近衛近衛門。（漢字合ってるか？）外見からして明らかに妖怪の……「こらこら妖怪など言っ出ない。」

「……ッ！？」

なんだこいつら！？ネギま世界のキャラで心を読めるのは本屋ちゃんだけじゃなかったのか？

「なるほど修行のために日本で学校の先生を……」

なんかネギ君と学園長が色々会話していたが原作どうりだったので
適当に聞き流した。

あ、しずな先生だ。うん。大きすぎる。胸とか。胸とか。胸とか。

ところで話題変わるけどシャナのヘカテーとリボーンのユニって外
見似てるよね。似てない？あっそう。

「もうっそんな何から何まで学園長ーっ！」

おっとそろそろわたしに話が振られるころかな。

「和風君。」

「はい。」

「君は2年A組に編入してもらっ。その3人と同じクラスじゃ。」

その言葉を聞いた3人の顔が少し嬉しそうになった。ふふ、その反
応からしてどうやらアスナの評価も取り戻せたようだ。

「分かりました。」

「うむ。それじゃ皆仲良くするのじゃぞ。」

廊下では険悪なムードが続いた。
全くアスナめ。なんでネギ君のような可愛い子供が嫌いなんだ。よく分からないなあ。

「じゃあわたし先行きますから先生！」

と、ネギ君に冷たく言い放つとわたしのほうを向いた。

「じゃあ和風。先行くから。」

「うん分かった。それとわたしのことは志音って呼んで。」

「分かった。じゃあね。」

もうちょっとネギ君に優しくできないかなあ。

「ねえねえネギ君。」

「は、はい。和風さん。」

ああ、かわいすぎる。

「これからよろしくね。それとわたしのことは志音って呼んで。」

「は、はい。よろしくお願いします。志音さん。」

ネギ君はにっこりと笑ってそう言った。

ああ、かわいす（ry

「二人とも。おしゃべりは終わり。ここがあなた達のクラスよ。」

おっと。ネギ君の可愛さに悶えていたら着いちゃったよ。

「あ・・う・・ちょ、ちょっとキンチョーしてきました。」

「うん、たしかに緊張するね。」

これは事実。前の世界じゃ転校なんてしたことなかったから案外緊張している。

さて。これからクラスメートとなり様々な苦難を共に乗り越えることとなる31名との初顔合せ。

どうなるかな？楽しみだ。

第二話 ネギ君が可愛すぎるb y志音（後書き）

主人公はネギ絡みになるとキャラが壊れますw

しかし小説書くのって難しい・・・。

第三話 転校生はチート転生者（前書き）

早く戦闘描写を書きたいので若干適当です。

次回は少し場面が飛びます。

第三話 転校生はチート転生者

「今日転校してきました和風志音です。皆仲良くしてね」

よしよし。我ながら無難な挨拶だと思う。いやークラスの皆が全員知らない人間って状況は緊張するね。

うーんしかしネギ君のインパクトが強すぎてわたしの印象が薄くなっちゃたかもなあ。まあネギ君だから仕方ないか。お、まわりから可愛いとか、スタイルいいとか聞こえる。ははは、褒めても何もでないよ。というか朝倉の隣の子って幽霊のさよちゃんだよ。うん、凄く怖い。

「じゃあ和風さんはあっちの余ってる席に座って。」

つと言ってしずな先生が教室の隅のほうを指差す。

おお、隣に座ってるのはエヴァちゃんじゃないか。まああそこ以外に空いてる席ないしね。わたしは何十年も使われてるであろう年季の入ったイスに腰掛けた。

「いや、これからよろしくね。」

そして隣の席の金髪ロリの外人で吸血鬼、しかも力は最強クラスで今は力を封じられていると言う忍ともろかぶりの少女に声をかけた。設定的にはエヴァちゃんのほうが先だよな？

「あなたの名前は？あ、わたしの名前は和風・・・さっき聞いた。」
「あ、そう。」

うゝんそっけない。

「じゃあわたしのことは志音って呼んで。」

可愛らしい仕草を交えて言ってるのに以前エヴァちゃんはツンツと
したまま。

こうなったら奥の手だ。

「これからよろしくね。」

わたしはそこで言葉を切ってエヴァちゃんの耳元に口を寄せ

「ダーク・エヴァンジェル
闇の福音さん」

っと小声でささやくように言った。

「・・・っ!?!」

お、反応した。まあ魔法使いから見ればわたしは一般人だし。

「貴様一体・・・」いえーいこれからよろしくねゝ志音さん。」

なにか言いかけたエヴァちゃんだったけどそれは前の席の子――
明石裕奈の声によってかき消された。

「チツ。」

そう舌打ちをするとエヴァちゃんはこちらから顔を背けてしまった。
まあ興味を持つてくれただけでもよしとするか。わたしはそこでエ
ヴァちゃんに向けていた視線を裕奈に向ける。

「こちらこそよろしく。あと志音さんってさん付けじゃなくて呼び捨てかちゃん付けで呼んでね。」

「オッケー。わたしの名前は明石裕奈。じゃあ分からないことがあったらなんでも聞いてね。志音。」

とかそのまま裕奈の隣の子、茶々丸さんもこちらを向こうとしたがしずな先生に注意されてしまって自己紹介できなかった。

一時間目の授業は授業にならなかった。

アスナはネギ君に消しゴムを飛ばすし、それが原因で乱闘が起きて終了。

楽なのはいいけど。

そのあとの休み時間。わたしは質問攻めにあつた。

刹那、龍宮、千雨、ザジ以外は大体来てくれた。皆良い人ばかり

でなじめそうだった。

そして放課後。わたしはみんなの誘いとエヴァちゃんの視線を振り切ってネギ君を尾行した

ネギ君を尾行した。

なんとも犯罪のにおいをする文章だ。

いやべつにストーカーしてるわけじゃないよ？

原作介入するためにはアスナと一緒に魔法を目撃して魔法の存在を知った。というようにしたほうが動きやすいと考えたわけだ。

わたしは「志音専用」と書かれた電柱の影から様子を見ている。

お、本屋ちゃんキタ。

頃合と思いアスナに近づいてく。

「やあアスナ。」

「ん？ああ志音。どうしたのこんな所で？」

「いやあ散策だよ。それよりアスナあれ、ネギ君じゃない？」

「あ、本当だ。」

そこで本屋ちゃんが足をひねって階段から落ちた。本屋ちゃんには悪いけどグットタイミング！

「あれ本屋ちゃん！？危ない！」

慌てて駆け出すアスナ。ついでにわたしも。

が、アスナが間に合う前にネギ君が杖を取り出し落下を止め、そして本屋ちゃんを受け止めた。

「アタタタ。だ、大丈夫？宮崎さん……。」

と言って起き上がるネギ君。

わたしたちと会う目線。

流れる静寂。

数秒の沈黙の後、本屋ちゃんが目を覚ましたのが合図になった。

駆け出したアスナとわたしは驚異的コンビネーションでネギ君をさらい杖を拾い上げ、ネギ君を茂みに連れ込んだ。

ネギ君を茂みに連れ込んだ。

なんとも犯罪のお（ry

ネギ君を木の幹にたたきつける。

「あああなたやっぱり超能力者だったのねー！ー！！」

「い、いや違いま「誤魔化しても無駄だよ。」

ネギ君の言葉をさえぎり、興奮するアスナをいさめながらわたしは言葉を続ける。

「アスナ一人ならともかくわたしだって見ちゃったんだから。さつさと吐いたほうが良いよ。」

「そうよ白状なさい！超能力者なのね！」

「ぼ、ぼくは魔法使いで……」「どっちだって同じよ！」

アスナの一言でビクツつとするネギ君。ああ可愛（ry

「こ、こうなったら記憶を消させて頂きます！」

う、これは記憶消去とかいってパンツを消すあれか。

「ええっ！」

「ちょっとパーになるかもしれないですが許してくださいね。」

「ギャーーーーちょっと待ってーーーーっ！てゆつか志音！！なにわたしを盾にしてるのよ！」

「いやだつて記憶消去とか嫌だし。」

「わたしだつて嫌よーーーー！」

本当はノーパンが嫌なんだけどね。
そして詠唱が完了した

「消えろーーーーっ！」

「キャーーーーー！」

原作通りにアスナのパンツとスカートが消え去る。

「あ、あれ・・・？」

しかもこのタイミングで「おいそこのやつら。なにやってるんだ。」と高畑先生がやってきた。最悪だな……。ごめんアスナ・

・・。

夕焼けの空にアスナの絶叫が響いた。

「うん。ホントごめんアスナ・・。」

その後。なんやかんやでアスナと高畑先生の仲を取り持つことになった。

そして現在位置は下駄箱。

「うん・・・。もういい・・・。もういいから思い出させないで・・。」

うう、こんな反応されるなら怒ってもらったほうが良いかも。

「で、アンタどーゆー魔法とか使えるのよ。」

「えーと修行中なのであまり多くないんですが……。」

「惚れ薬とかないの？」

これはアスナ

「すみませんなんです。」

「かめは○波とか撃てないの？」

これはわたし。

「すみません意味分らないんですけど……。」

あきれられちゃった。

「んーいまいち使えないわねー……。」

「あとできることと言ったら読心術ぐらいです……。」

「それよー!!」

アスナは読心術か……。それをうまく使って……。なぐとぶつぶつとぶやき始めた。

「早速実行よー!!荷物取ってくるからそこで」「」「」ようこそーネギ先生&志音ーッ!!」「」「」

「」「へっ?」「」

アスナが教室の扉を開けると中は歓迎パーティーだったかんじだった。

教室のいたるところには飾り付けがなされ、ジュースやお菓子などの食べ物が置かれていた。

「あ・・・そーだ今日あんた達の歓迎パーティーするんだっけ。忘れてた！」

これ買い出しといって手に持ったビニール袋を見せてくる。
いや、忘れるなよ・・・。まあノーパンとか色々あったし。

「ほらほら主役は真ん中。」

といって朝倉がわたしとネギ君の腕をつかんで引つ張っていく。
主役？あ、そっか。わたし転校生だったな。

席に座ったわたしに、皆ジュースや肉まんを渡してくる。おお、この肉まんうまい。

なんてことをしてるうちに時間がどんどん過ぎていった。

なんか知らないけど廊下から喧嘩と思われる声が聞こえてきた。あ、しまった。原作イベント介入し損ねた。

まあいいや。まだ始まったばかりだし。これからこれから。

「はあほんとにひどい目にあつた。・・・全部あなたのせいよ!」

「今は自業自得な気がしますけど・・・。」

「何ですって!。」

歓迎会も終わり、今は皆で帰路についてる。

「ねえねえあまり詳しく聞いてないんだけどさ。詳しく教えてよ。」

ほんとに全部知ってるけど知らないふりして聞いてみる。

「いつのせいでひどい目にあつたのよ。」

「な、あれはアスナさんが悪いんじゃないですかー。」

「……まあ深くは聞かないでおいとくよ。」

また喧嘩が始まりそうだし。

さあ、これから毎日が楽しくなる。ほんと楽しみだ。

余談だけどイタズラに参加した美空は執事ナツクルで、イタズラを持ちかけた鳴滝姉妹はエンド・オブアースで制裁を加えた。

第三話 転校生はチート転生者（後書き）

最後のはまよチキのスバル様の必殺技です。

あと終わりのほうが適当で申し訳ございません。

第四話 図書館島 前編 〱魔法の本強奪計画〱（前書き）

長くなつた上にクダクダになってしまった。（毎回そうなんですけど）orz。

第四話 図書館島 前編 魔法の本強奪計画

わたしが転生してから何週間か過ぎた。

季節は春、そして3月の半ば。

この何週間の間結構いろいろなことがあった。

まずは惚れ薬事件。

わたしは元・エクス・ハンドラー演操者の魔力をはじく能力（体質？）を使い、惚れ薬の効力から逃れた。が、それだと面白くないので、惚れ薬が効いてるフリをしてネギ君にキスを迫ったりした。

ネギ君にキスを迫ったりした。

・・・これは犯罪だね。いやでも同じ十代なんだし大丈夫（ry

他にも服を脱がそうとした。（まあアスナに止められたけど。チッ。

）

次にあつたのは大浴場での騒ぎ。

胸が大きい人がネギ君をもらえとの事だったので、真庭忍法骨肉細工を部分的に使い、胸だけちづ姉と同じ大きさにした。そして皆

の前に出ようと思ったたら、その前にネギ君がアスナに魔法を唱えちゃって結局騒ぎは終結。わたしの（わたしのではないが）スタイルが披露されることはなかった。（胸は結局元に戻した。と言うか制服姿を数回しか見せたことがないって言っても流石にばれるよね。）

最後は高等部とのドッチボール対決。

対決の前に括弧つけて『えーモブキャラの皆さんこんにちは。』とか言ったら勝負前に相手から降参してきた。心折っちゃった。立ち直れるように心理^{メンタル}掌握で修復したけど……。ちよつとふざけ過ぎちゃった。テヘツ

なんていろんなことがあって、わたしはそれを楽しんできた。心から。

なんて気取ってみたりしてるうちに時計の針の指す時刻は朝の8時15分。

もう部屋を出なきゃ遅刻、というか急いだって遅刻する時間なんだからわたしには関係ない。

最近便利なスキルがいくつか追加されたんだよね。なんでわたしが知ってるかと言うと、神様が作って部屋に置いてくれたipa d（詳細はキャラ設定見てくれればわかる。簡単に言うとな能力の一

覧表。）に新しい能力がいくつか追加できます。ってメールが神様から来て、そのなかに便利なスキルがあったからもらった。

「さて。そろそろ行こう。」

わたしは新しく貰ったアリバイブロック腑罪証明を使い、昇降口近くの木の陰に移動した。

期末試験。そして図書館島。これが次に起きる事件。
今回のわたしの計画は魔法の本の強奪。

前の世界、わたしはいわゆる馬鹿校と呼ばれるところに通っていた。受験勉強なんてしたくないからってちょっと勉強すれば入れる高校をチョイスしたからだ。

しかしここ、麻帆良学園は名門と呼ばれるような頭のいい学校。テスト勉強しなくちゃ赤点確実。だが勉強なんてしたくない。なので本を奪い取り、みんなで脱出。そしてバカレンジャーともども楽にテストを乗り切ろうと言う魂胆だ。

まあ、普通に勉強すればわたしの今の頭脳は結構な異常で強化されてるからめだかちゃんクラスの天才にもなるうと思えばなれるし、能力を使えば多分カンニングもうまく良くと思うけど、それじゃあつまらないからこの計画を考えたわけさ。

アフノーマル

さて、英単語野球拳なんていうふざけた遊びも終わって夜。大浴場にはバカレンジャー + α が集結していた。

「おーい皆なに話してるの？」

「うん？ああ志音さんですか。」

こう返してきたのは夕映。風呂で飲み物飲むな。抹茶コーラってなぞぞ。

「ちようどよかった志音！実は今ねえ……。」

これはハルナ。ハルナから事の顛末を聞く。

「はゝ最下位だと小学生からやり直しね。それは大変だゝ（棒読み）」

ありえないだろ。普通。しかしそれを信じるって事は、ほんとに馬鹿なんだな。バカレンジャー。

「それでね！これから図書館島に行つて読めば頭が良くなるまほーの本を探しに行こうって夕映ちゃんが言ったの。」

これはまき絵。

でも流石に魔法はないよねーっと更に続けた。

（ねえねえ志音。）

まき絵と会話をしていたらアスナが小声で話しかけてきた。

（なに？アスナ。）

わたしもアスナに合わせて小声でしゃべる。

（わたし思ったんだけどさあ。魔法使いのネギが居るんだつたら魔法の本があつてもおかしくないわよね・・・。）

（奇遇だな。わたしもそう思ってたところだよ。）

本当は思つてないけど。

（そうよね・・・。）

そこで言葉を切るとよし、と息を吸い。

「行こう！図書館島へ！！」

っと高らかに叫んだ。

というわけで図書館島。

「――現在ではその全貌を――。」

地下に向かう石階段を降りながら、夕映ちゃんは解説を続ける。

わたしはその言葉を聞き流しながら、どうやって本を奪うか考える。

皆にはまだわたしの正体はばらしたくないし。どうしようか……。

正体をばらすとしたら吸血鬼編か……。まあ修学旅行あたりかな？
まあそんなことはあとで考えようか。

「――麻帆良大学の提唱で発足したのが――。」

おっと考え込んでたらもう着いちゃったようだ。

豪華なつくりの扉を、夕映ちゃんは開けた。

「わたしたち麻帆良学園図書館探検部なのです！」

そこは一面本棚という異様な光景だった。

おおーやっぱマンガで読むのと実際に見るとのじゃ迫力が違うねー。

「わー本がいっぱいホントに凄いぞ！」

はしゃいでるネギ君もかわ（ry

「ねえ夕映ちゃん。あとどれくらい歩くの？」

「はい。」

まき絵の言葉を受け夕映ちゃんは地図を広げた。

「内緒で部室から持ってきた宝の地図によると……。今いるのはここで……。」

と、地図の真ん中あたりを指さす。

「地下１１階まで降り、地下道を進んだ先に目的の本があるようです。」

そして指した指を地図のはじのほうに移動させる。

「往復でおよそ四時間。今はまだ夜の七時ですから……。」

「ちゃんと帰って一応寝れるね！」

でも片道二時間はちよと遠いよな……。

まあ人類最強の身体能力を使えばその程度疲れないだろうけど。

「では出発です！」

「「「おーっ！」」」

夕映ちゃんの言葉とみんなの歓声とともに、図書館島探検がスタートした。

結論。バカレンジャーは人間じゃない。

まあわたしも人のことは言えないけど。

落下した瞬間リボンを巻きつけ落下を防ぎ。

倒れてきた本棚をとび蹴りで吹き飛ばし。

降り注ぐ大量の本を全て受け止める。

楓や古菲はまだしもまき絵も人間離れしてるな・・・。

なんてことを考えてたら本棚と本棚をつなぐ板が真ん中から割れた。

あれ？やばくね？落ち・・・

「うわーーーー！」

「志音さん！！」

とっさにわたしは裾から一条のリボンを伸ばした。
放たれたリボンは上のほうの手すりに巻きついた。

あ、危ねえ……。なんとか落下を免れた……。

「大丈夫！？志音！」

わたしの前を歩いていたアスナがあわてて聞いてくる。

「うん……。なんとか……。」

「すごい志音ちゃん！わたしと同じことが出来るんだ！」

立ち上がったわたしにまき絵が目を輝かせて聞いてくる。

「あ……。前の学校で少し新体操をやってたんだ。」

めんどくさいから適当にごまかす。

「へえーそうなんだ」はい時間がないからさっさと進みますよー。」

夕映ちゃんの言葉で全員進みだす。

お弁当タイムをはさんでわたし達は先に進む。

まるで洪水にあった町のように膝まで水が来ている通路を歩き。
奈落の底のようなところをロープを使い降りていき。
這って行かなくや通れないぐらい狭い通路を進んでいく。

なんなんだここ・・・。

改めてそう思った。

長い道を越えて辿り着いた先はRPGに出てくるラスボスの間のよ

うな荘厳な場所だった。

「す、すす、すごすぎるーっ!？」

「わたしこつゆうの見たことあるよ!弟のプレステで!」

思い思いにはしゃぐ皆。

無表情で分かりづらいけど夕映ちゃんも感動しているように見える。

かくゆうわたしも少し感動している。

わたしは登山はしたことはないけど、登山者が山を登り終えたとき
ってこういう気持ちになるんだろうなあと思った。

まあいつまでも感慨に浸っているわけにはいかないので、わたしは
思考を切り替える。

そして歩いているときにまとめた考えを再び思い出す。

「!？あ、あれは伝説のメルキセデクの本ですよ!!信じられない
!!僕も見るのは初めてです!!」

うるたえる学園長を想像しながらほくそ笑んでいたら、ネギ君が熱
く語りだしてきた。

その熱弁は更に振るわれていく。

・・・アニメについて語るオタクのみたいだな。

とか結構失礼なことを考えている間に、皆はあまりに熱く語られた
その言葉を完全に信じきったようだ。

「やったー！ー！！」

「これで最下位脱出よー！！」

「一番のリアル」

一斉に駆け出した皆。

よし、今だ。

皆に合わせてわたしも走り出す。
そのとき。

ガコン！っと、何かが動く音がした。

「「「え？」「」」

本へとつながる道が縦に割れたのだった。

「キヤー！」

「いた！」

「わあ！」

予想外の出来事に対応できなかった一般人の6人は着地に失敗した。
人外であるわたしと楓は華麗に着地を決めた。

「これって・・・？ツイスターゲーム・・・？」

誰かがそうつぶやいたその時。

「フオフオフオ・・・この本が欲しくば・・・わしの質問に答えるのじゃーフオフオフオフオ。」

本を守るように造られていた石像の片割れ。

その石像が、まるでドラ。エに出てくるゴーレムが動く石像のように動き出したのだ。

それは学園長と同じ声をしていた。

というか学園長が魔法で操っているんだろうけど。

さて、計画実行といきましようか。

「——では第一・・・む？」

「せいっ」

まず、わたしは暗器術で隠し持っていたものをゴーレムめがけて投げた。

それはゴーレムの顔の前で破裂すると、とてつもない閃光と爆音を、あたりに撒き散らす。

何を投げたかと言うと、人質事件などでよく使われるスタングレネードだ。

レールガンでフレンドが使ってたあれ。

「きゃあー！」

「スタングレネード!？」

よし。これで皆の視力と聴力は殺した。（ちなみにわたしは耳栓と

専用ゴーグルでそれらを回避。」

これによりわたしが何かの能力を使ってもわたしが能力を使ったってばれない。

「むむ！？何も見えん！」

少しフラフラして、倒れてきそうで怖いゴーレムの奥。

そこに置かれている本に一条のリボンが巻きついた。

そのリボンはわたしの裾から伸びており、リボンが戻されたと同時に、わたしは本をキャッチする。

よし。これで本の安全確保はばっちり。

「さあ、くらえ。」

誰にも聞こえないようにわたしがつぶやいた瞬間。

わたしの体。そのまわりから、純白すぎる純白の光

———
マルチ
原始

崩しが放たれ、ゴーレムの体中を貫いた。

貫かれたゴーレムはバラバラに崩れ落ちていく。

残骸が地面に落ちていき騒音を撒き散らす。

後ろの壁も貫いてしまったがそれは大嘘憑きでなかったことにした。

「うっ……。」

「やっと見えるようになってきたです……。」

ちょうど壁の穴を修復し終わつたと同時に皆の視力と聴力が回復してきたみたい。

「あれー？ゴーレムは？まほーの本は？」

「さっきの閃光と爆音は一体なんだったでござるか・・・？」

「っていつか志音、その本って・・・。」

アスナの一言で全員の視線がわたしが抱える本に集中する。

あー・・・。どう言い訳しよう？

「えーと・・・し、視力と聴力が回復したときに、ふと下を見たらこれが落ちてたんだ・・・。」

うゝんまあバカレンジャーを騙すぐらいだったらこの程度でも大丈夫だろう・・・。

てゆうか確かめようないから普通の人でもこれで誤魔化せるだろうね・・・。

ネギ君も木乃香も信じてるみたいだし。

「まあ、さっきのゴーレムや閃光と爆音も気になりますが、魔法の本は手に入れられたので結果オーライとしましょう」

うつすらとした微笑を顔に張り付かせながら夕映ちゃんは言った。

「じゃあこれで・・・」

「ええ、最下位脱出です。」

その言葉に、一同は歓喜に包まれた。

「やったー!」

「これで勉強しなくて良いアル!」

「よっしゃー!」

最後のはわたし。

やっぱり勉強しなくて良いっていうのは嬉しいもんだよ。

「じゃあ帰ろうか!」

手にした魔法の本を握り締めてまわりの皆に呼びかける。

あれ・・・?

返事がない。ただの屍のようだ。

というのは冗談だけど反応がない。

というか全員床に突っ伏している。

「なに・・・これ・・・？」

「眠らせただけです。安心してください。」

原作にない展開に軽くテンパっているわたしの前に一人の男が現れた。

足音も何も聞こえなかった。まるでいきなりそこから現れたように男は現れた。

実際、空間移動のような能力を使って現れたのだろうけど。

表情が強張ってるのが分かる。

汗の量が増えているのが分かる。

「ふふつ。そんなに怖がらなくても大丈夫ですよ。」

その男は白いローブを着ていた。

フードを深々とかぶっている顔は見えない。が、声からして若い男だと言ったことがわかる。

「・・・誰？」

わたしは警戒心むき出しで訊いた。

「アルビレ・・・いや、クウネル・サンダースと申します。」

第四話 図書館島 前編 魔法の本強奪計画 (後書き)

後編に続きます。

次回は初戦闘描写です。
がんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3794u/>

魔法先生ネギま！&チートな美少女転生者

2011年10月8日14時07分発行